



月報

No.450
2017年
11月

日本キリスト教団
茅ヶ崎香川教会
茅ヶ崎市香川1丁目34-35
<http://kagawachurch.jimdo.com/>

説教 『 神の憐れみが悔い改めに導く 』

ローマの信徒への手紙 2章1節～4節

小河信一 牧師

1 だから、すべて人を裁く者よ、弁解の余地はない。あなたは、他人を裁きながら、実は自分自身を罪に定めている。あなたも人を裁いて、同じことをしているからです。² 神はこのようなことを行う者を正しくお裁きになると、わたしたちは知っています。³ このようなことをする者を裁きながら、自分でも同じことをしている者よ、あなたは、神の裁きを逃れられると思うのですか。⁴ あるいは、神の憐れみ^{かろ}があなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と寛容と忍耐とを軽んじるのですか。

本日の旧約（サムエル記下 12:5-8）と新約の聖書箇所は、それぞれおよそ、三千年前のダビデの物語、また、二千年前のパウロの言葉です。この大昔、三千年前と二千年前に記述されたことが、現在世の中で起こっていることに対する、鋭いメッセージになっています。言い換えれば、三千年前の出来事と二千年前の手紙は、相も変わらぬこの世の現象を写し出しているということです。

私が思い起こした、現在の現象というのは、ブーメラン発言またはブーメラン乙^{おつ}（ネットの用語）です。

ブーメランはかつて、狩猟使われた棍棒^{こんぼう}の一種で、手で投げ飛ばした後に、それが手元に帰ってくるというのが、大きな特徴です。そこから、或る人が他の人の失言やスキャンダルを追及した後に、同様の不祥事^{ふしょうじ}が本人に発覚し窮地に陥り、そして世の中から非難を浴びる、それを、ブーメラン発言（現象）と言うようになったのです。

まず、三千年前のダビデの物語から見てみましょう。

サムエル記下 12 章に記録されている「ブーメラン発言」は、こうです。ダビデが他人の悪事を批判する、それに対して、ナタンがそれはあなたにこそ当てはまります！、と反撃するという構成になっています。人に「死罪だ」と言い放ったダビデこそ、死罪にあたる悪事を働いていたのです。

これは、ダビデがうかつにも「ブーメラン発言」をしたというよりも、神が預言者ナタンをダビデのもとに遣わして、彼からブーメラン発言を引き出した、と言えるでしょう。それは、ダビデを「悔い改めに導く」という神のご計画だったので

す。

次に、パウロがユダヤ人を、「悔い改めに導く」ために、罪について説き明かした箇所を見てみましょう。

ローマの信徒への手紙 2:1——

あなたは、他人を裁きながら、実は自分自身を罪に定めている。あなたも人を裁いて、同じことをしているからです。

「他人を裁きながら」の箇所が、他人に矛先を向けている、「ブーメランを飛ばしている」ことに相当します。しかしながら、そのブーメランは自分自身に返って来ます。それが、「(あなたは) 実は自分自身を罪に定めている」とのパウロの指摘です。パウロは、裁いているあなたこそ、より厳しく裁かれる者ではないのかと、「同じことをしている」自分自身を省みるように勧めています。

パウロは前段の「悪徳表」(ローマ 1:29-31) で 21 個もの罪過を掲げました。一転して彼は今、ユダヤ人と対峙しつつ、このまま他人を裁き続けるならば、ますます自分自身の罪を大きくしてしまうと、隣人への高慢さに論点を絞り込んでいます。

ところで、パウロは、ローマの信徒への手紙 2 章の初めを区切りとして、語りかける相手を、「人間」(ローマ 1:18) または「異邦人」(同上 1:13) から「ユダヤ人」へと移行しています。が、ローマ 2:17 で「あなたはユダヤ人を名乗り」と言うまで、パウロは「ああユダヤ人たちよ！」と、相手を特定するのを先延ばしにしています。「あなた」という一般的な言い方で連呼するだけでは、それは自分に向けられている、と思わないかも知れません(「ギリシア人」と並列されているローマ 2:9,10 の「ユダヤ人」も読者を限定してはいません)。

なぜでしょうか？ それは人から指摘されて、ユダヤ人がそのような罪を犯しがちになっている、と知るのではなく、自分自身から気がついてほしいと、パウロが願っていたからではないでしょうか。自分が、我が罪を悟ることが大事なのです。自分たちは選民である、あるいは、神の律法を受け取っているというユダヤ人たちの思いが、異邦人を侮る高慢さへと転じていった、それがユダヤ人であるパウロ自身の罪の原点であったのです。

本日の二つの聖書箇所、旧約は具体的な物語として、また、新約はそれに対する福音的な理解として、さらに詳しく読んでみましょう。

サムエル記下 12 章では、他人を裁きながら、いっこうに自分を省みない人の姿が、あたかも演劇であるかのように描かれています。いわば、脚本・神、主役・ダビデ、脇役・ナタンという形で、その舞台へ私たち・観衆の視線を引き込みます。

サムエル記下 12:1——

主はナタンをダビデのもとに遣わされた。ナタンは来て、次のように語った。

「二人の男がある町にいた。一人は豊かで、一人は貧しかった。」

王宮にいるダビデの前に、何の前触れもなく、ナタンが現れました。そして、ナタンは一つの譬え話を語り始めました。一体、何が起こるのか、ダビデには何の心の用意もありませんでした。神がこの時を選ばれ、巧みな筋立てをもって、ダビデを自分自身に向き合わせられました。

サムエル記下 12:1-4 の譬え話を要約しましょう。

豊かな男と貧しい男がいました。貧しい男は、一匹の雌めすの小羊を飼っていました。「彼はその小羊を養い 小羊は彼のもとで育ち、息子たちと一緒にいて 彼の皿から食べ、彼のわんから飲み 彼のふとこで眠り、彼にとっては娘のようだった」というほどに可愛かわいがっていました。ある日、旅人が豊かな男の家を訪れて来ました。すると、豊かな男は多くの羊や牛を持っていたにもかかわらず、貧しい男から、一匹の雌めすの小羊を取り上げました。そして、自分の客に振る舞ったのです。

このナタン派遣の直前に、ダビデは、兵士であり王の僕しもべであるウリヤを計略的に戦死させ、その妻バト・シェバを王宮に引き取って、妻としていました（サムエル記下 11 章）。しかし、この単純明解な話を、聡明なダビデにして、自分に差し向けられたものとして、耳を傾けることはありませんでした。

サムエル記下 12:5-6——

⁵ ダビデはその男に激怒し、ナタンに言った。「主は生きておられる。そんなことをした男は死罪だ。⁶ 小羊の償いに四倍の価あたいを払うべきだ。そんな無慈悲なことをしたのだから。」

小羊が家族同様だとは言え、「死罪だ」と言うダビデの裁定は厳し過ぎるようにも思えます。実際には、ダビデが想起した旧約律法、「人が牛あるいは羊を盗んで、これを屠ほふるか、売るかしたならば、牛一頭の代償として牛五頭、羊一匹の代償として羊四匹で償わねばならない」（出エジプト記 21:37）というのが正当な処罰です。他人事だから、「死罪だ」と口走ってしまったのでしょうか。

ダビデの発した言葉の最後、「そんな無慈悲なことをしたのだから」の原意は、「なぜなら彼は憐れまなかつたからだ」です。つまり、憐れみの無い人間がしてしまったのだ、ということです。では、誰に、どのようなお方に、憐れみがあるのか、後で、ローマの信徒への手紙で確かめることにしましょう。

サムエル記下 12:7——

ナタンはダビデに向かって言った。「その男はあなただ。イスラエルの神、主はこう言われる。『あなたに油を注いでイスラエルの王としたのはわたしである。』」

「その男はあなただ」は、原語・ヘブライ語で アター ハイーシュ、そして英語で **You are the man!** となります。旧約学者、H.W.ヘルツベルクは、これは聖書の中でも最も正鵠を射た（核心をついた）台詞の一つであると述べています。この忘れがたいリアルな場面で放たれた言葉を、私たちの信仰生活において座右の銘としたいものです。

ナタンまたは神の側から見て、「その男はあなただ」、そして、ダビデの側から見て、「その男はまさしく私です」ということです。それは、返って来たブーメランが自分を撃つごとく、良心の痛みを来たさせます。ダビデは神の突然の介入によって、隣人を傷つける重い罪を犯したのは、この自分に間違いありません、と告白するように導かれました。

サムエル記下 12:13——

ダビデはナタンに言った。「わたしは主に罪を犯した。」

ナタンはダビデに言った。「その主があなたの罪を取り除かれる。あなたは死の罰を免れる。」

ダビデは、部下・ナタンの背後に、神がおられることを見ていました。王また信仰者として、亡きウリヤやバト・シェバ、そしてすべての家臣・民に謝罪する、その初めに、ダビデは主の前に悔い改めをなしたのです。

さて、ダビデの出来事から一千年後、パウロは、ダビデの末裔であるユダヤ人に語りかけました。

ローマの信徒への手紙 2:1——

だから、すべて人を裁く者よ、弁解の余地はない。あなたは、他人を裁きながら、実は自分自身を罪に定めている。あなたも人を裁いて、同じことをしているからです。

「すべて人を裁く者よ」の直訳は、「ああ、裁いているすべての人間（男）よ」（**O man, whoever you are who judge**）で、「ああ」という嘆きが込められていることが分かります。そして、同類の句が後続の 2:3 に登場し響き合っています。すなわち、「裁きながら……をしている者よ」の箇所は、「ああ、裁いている人間（男）よ」（**O man, you who judge**）が直訳です。

パウロが連呼しているその相手は、人を裁きながら実は、彼こそ裁かれるべきだという男です。するとこれはまさに、ナタンがダビデに目覚めるように呼びかけた言葉、「その男はあなただ」（**You are the man!**）と共鳴していることが分かります。付け加えれば、ドイツ語の名曲「ひとよ（**O Mensch**）、汝が罪の 大いなるを嘆け」（讚美歌 II - 99 番）も、それらに和しています。

パウロの嘆きを心開いて受け止めようとしない、かたくな（ローマ 2:5）ユダヤ人ですが、パウロは、忍耐強く冷静に彼らに語りかけます。

「弁解の余地はない」（ローマ 1:20、2:1）というのは、弁解に走りがちな人間の本性を見抜いての言葉です。しかし、ただ「余地はない」と、相手を追い詰めるではありません。自分でどうにかしようとししないで、あなたの身と魂を、神の御力と豊かさにゆだねなさい、と勧めているのです。

私たちの罪の破れについて、父なる神はすでに、主イエス・キリストによって取り繕う恵みの出来事を起こしてくださっています。弁解に走るのではなく、主の前に、申し訳ありません、悔い改めます、と頭を垂れることです。私たちの罪は、主の十字架と復活の御業によって赦されています。

この文脈で「ああ、裁いている人間（男）よ」との嘆きは、ユダヤ人に向けられたものですが、他人を裁くことは、あらゆる人間の本性に潜んでいます。私たちはその罪性において、人の陰口を言うことを好みます。また、人の悪口を聞くことを好みます。裏を返せば、自分がうわさされたくない、自分のことは触れられたくないのです。「同じことをしている」（ローマ 2:1,3）にもかかわらず、自分を守り、人を侮るといのは、問題ではありませんか、とパウロは問うています。

ここで、「人を裁く」ことと、「人を諭す」（コロサイ 1:28）または「人を教える」（ローマ 12:7）とは、どのように違いますか、と質問されたら、あなたはどうか答えるでしょうか。特に、叱責をもって厳しく臨まなければならないような時に、どのように、人を諭し、教え導くのか……。

他人が悪いことをしており、それを続けさせないように介入・助言する時、私たちは自信をもって、「裁いてはいない。教え諭しているのだ」と言えるでしょうか。そこにも、人間の傲慢さが潜んでいるのではないのでしょうか。明白な犯罪や悪業はともかく、澄んだ目で「人の罪」を見て取るのは、信仰に拠らねばなりません。悪に善をもって接し、兄弟姉妹を教え導くことも、神からの賜物です。

ローマの信徒への手紙 2:4——

あるいは、神の憐れみがあなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と寛容と忍耐とを軽んじるのですか。

神は、私たち・罪人に対し、「豊かな慈愛と寛容と忍耐」をあらわしてくださいました。他人を裁いているのか、それとも、主にあって他人を叱っているのか、それは、私自身が、神の「豊かな慈愛と寛容と忍耐」に寄りすがっているか否かによるということです。私たちは、この神の豊かな御言葉と御業に倣うことができるよう祈りたいと願います。

実際、パウロは、「神はこのようなことを行う者を正しくお裁きになると、わたしたちは知っています」（ローマ 2:2）と言い、ユダヤ人の立場を尊重しています。少なからぬユダヤ人が幼い頃、ナタンの易しい譬え話で始まるこの物語を、親から聞かされていることでしょう。その点で、彼らは主なる神の厳しい裁きを「知っています」。その上で、パウロは、「あなたは、神の裁きを逃れられると思うのです

か」(ローマ 2:3)と問い詰めています。人間の罪深さのゆえでしょうか、神の裁きに対する切迫感がありません。何とかなんとでも思っているのでしょうか。神は見逃してくれるかも知れないと考えているとしたら、何と浅はかなことでしょうか。

ローマの信徒への手紙2章全体として、古き世代、救われる以前の人間、脱ぎ捨てるべき罪性の内にある人間について、パウロの論議が展開されています。その中で、2:4には、神の慰めが告知されています。

あるいは、神の憐れみがあなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と寛容と忍耐とを軽んじるのですか。

それまでの「神の裁き」から「神の憐れみ」へと急展開しているように見えます。

サムエル記下12章にあるように、豊かな男は「憐れみのない」行いを、すなわち、罪なる行為を隣人に犯しました。それに対し、神は憐れみのある、憐れみの豊かなお方です。パウロは、神の裁きを恐れるばかりでなく、それを超えたところにある神の憐れみに、人々が思いを寄せるよう求めています。

大切なことは、「その男はあなただ」(You are the man!)との裁きが下ったところで、あわてふためかないこと、余所見しないことです。鋭いブーメランがあなたを突き刺しても、直ちに、罪ゆえの死に至ることはありません。その時こそ、「神の憐れみがあなたを悔い改めに導く」のです。人の罪を担ってくださった十字架の主イエス・キリストが、その場に倒れ伏しているあなたを見守っておられます。

パウロは、「神の憐れみ」とは、「豊かな慈愛と寛容と忍耐」であると、それを受け容れようとしなない人たちに説き明かしています。

最後の「忍耐」は、怒らないで気長く我慢するという意味です。つまり、あなたの罪過を見逃してはいないけれども、今直ちに裁かないで、あなたが「放蕩息子」の旅から帰って来る(ルカ 15:11-32)のを待っておられるということです。

そして、この箇所には書かれていませんが、どのように、神の「豊かな慈愛と寛容と忍耐」があらわされたのか、と言えば、主イエス・キリストの受肉、伝道、そして十字架と復活において、それらは啓示されました。神の憐れみにより、十字架の主キリストに、私たちの罪は負わせられ、私たちは赦されたのです。

ローマの信徒への手紙 2:1 冒頭に、「(あなたは) 実は自分自身を罪に定めている」という重苦しい言葉がありましたが、旧約に次のような預言があります。

イザヤ書 50:9——

見よ、主なる神が助けてくださる。

誰がわたしを罪に定めよう。

「誰がわたしを罪に定めよう」という反語疑問は、誰がわたしに有罪の判決を下せようか、もう誰もわたしを責めたりしない、との意です（他に詩編 37:33、ヨハネ 8:11 参照）。

もちろん、人が罪を認め、告白することは大切です。その時、周りから非難が飛んで来るかも知れません。しかし、それで終わりではありません。「神が助けてくださる」のです。まことに主なる神は、主イエス・キリストによって、大いなる助けをあらわしてくださいました。

そこで今や、「その男はあなただ」（You are the man !）は、告発・叱責の言葉から、救われる「その男（女）はあなただ」という恵みの言葉に変えられました。

ルカ福音書 23:43——

するとイエスは、「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる」と言われた。

この世において悪人と断罪された男、しかし、その「あなた」こそ「わたし」と共に天の国に入れられると、主イエスは宣言されました。私たちはこの礼拝の中で、「その男（女）はあなただ」との呼びかけを、罪の悔い改めへと導く声として聞きたいと願います。

茅ヶ崎香川教会月報
No. 450
2017年11月26日発行
編集発行：日本キリスト教団
茅ヶ崎香川教会
発行責任者：小河信一
編集責任者：波木井奈津子

